

魂魄觀の変遷における『白虎通』の位置

——情性篇を手掛かりに——

白雲飛

はじめに

「魂魄」は最初から「魂魄」として登場したのではなく、「魄」のみ（『老子』第十章の「營魄」）、「魂」のみ（『莊子』齊物論の「其寐也魂交、其覺也形開。」）と単独で現れたのであり、その後、「魂魄」という熟語が多用されるようになる。「魂魄」の解釈にあたつては、後漢の許慎の『說文解字』を用い、「魂」を「陽氣也」、「魄」を「陰神也」と説明する傾向がある。また、池田末利氏は「魂魄觀念を説明した文として最も古いものは左傳昭公七年に見える子産の語であらう」⁽¹⁾とする。その『春秋左氏伝』昭公七年には「人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、用物精多、則魂魄強、是以有精爽至於神明」とある。『礼記』郊特牲の「魂氣歸于天、形魄歸于地」を魂魄の相反する二元論的な性質を述べた代表とするものもある。⁽²⁾この他に前漢の『淮南子』主術訓に「天氣為魂、地氣為魄」と、魂魄を天地に対応させる記述も見える。そして後漢の『白虎通』情性篇では「魂魄者何謂。魂猶伝伝也。行不休於外也。主於情。魄者迫然著人。主於性也。魂者芸也。情以除穢。魄者白也。性以治内」というように、「魂魄」を「情」と「性」とに結びつけて、論じられている。

ところで、この『白虎通』の記述には異文が存在する。この箇所が、「魂魄者、何謂也。魂猶伝伝也。行不休也。少陽之氣、故動不息、於人為外、主於情也。不魄者、猶迫然著人也。此少陰之氣、象金石著人不移。主於性也」となっているのである。ここでは、魂が、「少陽の氣」と「情」とに関連づけられ、「魄」が「少陰の氣」と「性」に関連づけられているのである。このような対応において「魂魄」を捉えることは当時、可能であつたのだろうか。この問題を考えるためには後漢までの魂魄觀を整理し、『白虎通』のテキストを整理することが必要である。

一・『白虎通』以前の魂魄觀について

『礼記』において「魂」と「魄」が関連すると思わせる例は郊特牲篇の「魂氣歸于天、形魄歸于地、故祭求諸陰陽之義也。殷人先求諸陽、周人先求諸陰」の箇所である。この例においては、「魂」は一字では現われず、「魂氣」と「形魄」という表現によつて「形魄」と対比されている。また、天地と関連づけられていることも明らかである。しかし「魂魄」を陰陽と対応つけて扱うことはされていない。

『礼記』には「魂魄」の例が礼運篇にただ一例、「君與夫人交獻，以嘉魂魄。是謂合莫」とあるのみである。この例では、「魂魄」の關係性については言及されていない。また『礼記』には陰陽という言葉がたくさん現れるにもかかわらず、「魂」や「魄」と関連づけられる記述はない。このことから、『礼記』においてはまだ「魂」と「魄」を二元的に陰陽と対応させて説明するに至っていないと考えられる。

『春秋左氏伝』昭公七年に「人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、用物精多、則魂魄強」という文がある。これは、池田氏によつて「魂魄觀念を説明した文として最も古いものは左傳昭公七年に見える子産の語であらう。…先づ注意すべき事は茲に既に陰陽思想が影響してゐる點である。」と指摘されていたのであった。しかし、この文には「陽」の一字があらわれるだけで、「陰」はあらわれていない。そして、『春秋左氏伝』の全文を見渡しても、「陰」は三五例、「陽」は一八八例あるが、「陰陽」という熟語はただ一例だけである。『春秋左氏伝』僖公十六年に「十六年春、隕石于宋五、隕星也。…君失問。是陰陽之事、非吉凶所生也。」とあるように、隕石を陰陽に関わる現象として説明している。やはり陰陽と結びつけて魂魄を語る箇所は見当たらない。

『春秋左氏伝』の原文を素直に読むと、「魄」が「陰」によつて説明されていないことから、「魄」・「陰」と「魂」・「陽」が対比されているのではなく、「魂」は「魄」の内の「陽」なる部分として「魄」に含まれていると解するのが自然な解釈に思われる。そうであれば『春秋左氏伝』の「魂魄」は「魂」を含んだ「魄」の全体を指すもの

と考えることができる。

このように、「陽」一字が現れるのみであつて、「陰」に言及されない箇所において、「魂魄」を陰陽二元論と結びつけるのは難しいだろう。さらに、『春秋左氏伝』においては陰陽だけを原理とするのではなく、「六氣」の考えによつても説明されるので、なおさら「魂魄」を陰陽に結びつけて説明すべき理由が見つからない。

『淮南子』第六卷・覽冥訓にある「解意釋神、漠然若無魂魄、使萬物各復歸其根」は、『莊子』外篇・在宥第十一の「心を解き神を釋て、莫然として魂を無からしむれば」を受けていると見られる箇所である。「魂」を「魂魄」と言い換えるだけであるから、明らかに『莊子』を意識した表現である。ここにおいて『莊子』が「魂」と呼んでいるものを、『淮南子』は「魂魄」と言い換えていることは注目値する。

『淮南子』第九卷・主術訓に「天氣為魂、地氣為魄」という表現がある。これは「魂」と「魄」を天と地に対応させるものであり、明確に二元的に捉えた記述である。「魂」、「魄」とも「氣」で説明され、『礼記』では対比される一方のみが「魂氣」と呼ばれているのと比べ、ここでは両方ともが「氣」と捉えられているのが特徴的である。また生きている人間の「魂魄」の言わば起源について述べたものであるから、これは後の魂魄二元論的な考え方のものになったのではないかと思われる。

さらに『淮南子』第十六卷・説山訓には「魂」と「魄」の擬人的對話を描く箇所がある。その對話において、「魂」は答える方で知的

に上位にあり、「魄」は質問する方で下位に置かれている。「魄」と「魂」との間に差を設けるこの記述も二元的なものである。

しかしながら、このように「魂魄」を二元的に捉える見方が見られる『淮南子』の中にも、「魂魄」と陰陽を直接に対応させる記述は見当たらない。その対応がどこから始まったかを考えるために、次に『白虎通』情性篇について検討してみたい。そこでは、「魂」の説明に「少陽之氣」が、「魄」の説明に「少陰之氣」が用いられ、「魂」と陽、「魄」と陰の対応が明確につけられている記述が見られたからである。

二 『白虎通』情性篇の内容について

考察の前にまず、情性篇の内容について確認しておきたい。情性篇はおおむね六つの部分に分けられる。第一、情性についての総論。第二、五性と六情の關係について。第三、五臟六腑と性情との關係について。第四、六情と方位との關係について。第五、魂魄について。第六、精神について。情性篇はこれらの六つの部分で構成されている。本稿が考察の対象とする「魂魄」と関わるのは、そのうち第一と第二と第五である。とくに第一の部分は情性と陰陽の關係を考えるうえで非常に重要な記述となっている。

第一では、情と性を陰と陽に結びつけている。「性は陽の施」、つまり、「性は陽から生まれる」とする。また、「性は、生なり」として、「生」を以て「性」の意味を説明する。そして「陽氣は仁」であ

ることを示し、性は陽から生まれたものであるから、「性は仁があるなり」と主張する。一方、「情は陰の化」したものととして、「情」は陰より生まれるとされる。「静」を以て「情」を説明する。また陰陽の氣と関連させ、「陽氣は仁、陰氣は貪」という。そのことから、陰氣より生まれた「情には利欲がある」と主張する。つまり、ここでは「性」―陽、「情」―陰、という対応關係が見られるのである。

第二では、「五性とは、仁義礼智信なり」として、それぞれの含意するところを定義する。ここでは「性」が、「五常」すなわち「仁義礼智信」と結びつけて説明される。また「六情とは、何の謂いぞや、喜怒哀楽憂愛惡」というように、感情や欲望で「六情」を説明し、人体の五臟六腑がそれを司るとする。第五は魂魄に関わる部分なので、後で詳述する。なお第六では、「情」を説明していた「静」を以て、「精」を解釈している。

三 『白虎通』における「魂魄」と陰陽の關係

本稿第一節で、前漢までの魂魄觀を検討したが、「魂」と「魄」とを対照する見方はようやく『淮南子』の、天地との対比において記述されるようになったのであった。後漢の中期に成立したと考えられる『白虎通』において、「魂魄」の対比が陰陽二元の見方と結びつけられているなら、『淮南子』と『白虎通』における、それぞれ天地との対応、陰陽との対応によつて、「魂魄」の二元対立的見方の道が開かれたと考えることができよう。

まず、「魂魄」と陰陽が対応づけられていると思われる『白虎通』の本文を見てみよう。『白虎通』について今日、底本として採用されること最も多いものは、清の盧文弨校訂本、すなわち抱經堂本である。現在、最もよく読まれる清・陳立の『疏証』もこれを底本としている。そこでは次のように記述される。

魂魄者、何謂也。魂猶伝伝也、行不休也。少陽之氣、故動不息。於人為外、主於情也。

魄者、猶迫然著人也。此少陰之氣、象金石著人不移。主於性也。〔魂魄とは何の謂いぞや。魂は猶お伝伝のごとく、行きて休まざるなり。少陽の氣にして、故に動きて息まず。人に於いて外たり、情を主るなり。〕

魄は、猶お迫然として人に着くがごときなり。此れ少陰の氣にして、金石に象て人に着きて移らず。性を主るなり。〕

ここでは、「魂」は「少陽の氣」として説明され、「魄」は「少陰の氣」として説明されており、「魂魄」と陰陽の明確な関連づけが見て取れるように、両者が対応関係にあるとする見方が既に存在しているのである。さらに「魂魄」は情性と関連づけられてもおり、その対応関係は、

魂—陽—情
魄—陰—性

となる。

しかし、別の版本の記述はこれとは異なる。そこには次のようにある。

魂魄者何謂。魂猶伝伝也、行不休於外也。主於情。魄者迫然著人、主於性也。

〔魂魄とは何の謂いぞや。魂は猶お伝伝のごとく、行きて外に休まざるなり。情を主るなり。魄は、迫然として人に著き、性を主るなり〕

この記述を載せるのは、清の王謨輯・清・乾隆五十六（一七九二）年刊『増訂漢魏叢書』や一九二七年上海掃葉山房出版『白虎通』（『圈點百子全書』所収）、上海商務印書館・四部叢刊・元刊本である。ここでは、「魂魄」を「少陽之氣、故動不息」と「少陰之氣、象金石著人不移」とする説明は見られない。もしこの記述がないとすると、『白虎通』にも「魂魄」と陰陽を関連づける記述はないことになる。この記述の有無は、魂魄観の展開を考えるうえで、見過ごすことのできない問題である。

抱經堂本系統の版本と漢魏叢書本系統の版本、この二通りの版本の異同は他にもある。情性篇第六部分の「精神」について述べた箇所である。抱經堂本では次のようになっていた。

精神者何謂也。精者靜也、太陰施化之氣也。象水之化、須待任生也。神者恍惚。太陽之氣也、出入無間。總云支體萬化之本也。
「精神とは何の謂いぞや。精は静なり、太陰施化の氣なり。水の化に象て、須からく生を待任すべきなり。神は恍惚、太陽の氣なり、出入間無し。總じて支體萬化の本を云うなり。」

これに対し、漢魏叢書本では次のようになってゐる。

精神者何謂也。精者靜也。太陰施化之氣也。象火之化、任生也。神者恍惚、太陰之氣也。間總云支體萬化之本也。

「精神とは何の謂いぞや。精は静なり。太陰施化の氣なり。火の化に象て、生を任ずるなり。神は恍惚、太陰の氣なり。間總じて支體萬化の本を云うなり。」

この二通りの原文を比べてみると、抱經堂本においては、「精」は「太陰施化の氣」、「神」は「太陽の氣」とされ、それぞれ明確に陰陽に対応づけられているのに対し、漢魏叢書本では、「精」は「太陰施化の氣」、「神」は「太陰の氣」とされ、「精」と「神」はともに陰と関連づけられているのである。さらに抱經堂本では「水」となっているのが、漢魏叢書本では「火」となっているという違いもある。つまり、前者には「陰」と「水」という対応から、より明確な陰陽二元的な捉え方があることが見て取れるのである。

以上のように、この二種の版本においては、抱經堂本では明確な「魂魄」と陰陽の対応が見られ、漢魏叢書本では「魂魄」と陰陽の明

確な対応が見られないという違いがあるのである。このことは、どのように理解したらいいのだろうか。

さらに問題を複雑にするのは、抱經堂本の情性篇の第一部分と第五部分を併せて読むことによつて、異なる魂魄・陰陽・性情の対応関係が見えてくることである。

情性篇の第一部分では、「性は、陽の施、情は陰の化なり」と書かれ、続く記述でも「情は陰に於いて生じ……性は陽に於いて生ず」と言われていたように、ここでは、「性」は「陽」、「情」は「陰」に対応するとされていたのであつた。しかし、情性篇の第五部分ではそれが「魂―陽―情」、「魄―陰―性」という関係となっていたのであり、ここでの「情性」と「陰陽」の関係を見ると、「性」―「陰」、「情」―「陽」となるのである。つまり、抱經堂本では、同じ情性篇の中に、情性と陰陽の対応について、まったく逆の関係になる記述が存在しているのである。

四、『白虎通』の版本と盧文弨校訂の是非

ここまで見てきたように、『白虎通』における抱經堂本系統の版本と漢魏叢書本系統の版本の原文の異同には、単なる文字の違い以上に、「魂魄」と陰陽との対応関係、さらには情性との対応関係という魂魄観の展開を考へるうえで、その関係が存在したかどうかという非常に重要な問題が含まれているのであつた。この問題を考へるためには、『白虎通』の版本の違いについて考察する必要がある。

東京大学森鷗外文庫に所蔵されている『白虎通』には森鷗外の書き込みを見ることができ、情性篇の該当箇所を見ると、「魂魄者何謂。魂猶伝也。行不休於外也。主於情。魄者迫然着人。主於性也」という原文に対し、朱筆で「魂魄者何謂（也）。魂猶伝也。行不休於外也（也少陽之氣故動不息於人為外）、主於情（也）。魄者（猶）迫然着人（也）。（此少陰之氣、象金石着人不移）。主於性也」（一）内が鷗外の書き込みと書き込んである。つまり、森鷗外は漢魏叢書本系統の版本を使って抱經堂本系統の版本の原文に改めているのである。このように、『白虎通』においては、原文をこのように校訂して読むのが通説になっていたと思われる。清の陳立『白虎通疏証』や『白虎通索引』（附本文）（伊東倫厚他編、昭和五四年、東豊書店）はこれを底本としている。また四部叢刊本を底本とした『白虎通逐字索引』（商務印書館、一九九五年）も『太平御覽』と抱經堂本によって原文をこのように校訂している。それでは、盧文弨の抱經堂本とはどのようなものであろうか。

清の陳立は、原文「魂猶伝也、行不休也」について「舊多誤脱、盧據御覽正」としている。また同じ清・孫詒讓の『札述』卷十「白虎通德論」は「『魂猶伝也、行不休也』。盧云、舊作『魂猶伝也、行不休於外也』、今據御覽八百八十六改」と言う。盧文弨は『太平御覽』に引く『白虎通』原文によって旧来の本文を改めたのである。抱經堂本の自注にも「舊作『魂魄者何謂。魂猶伝也。行不休於外也。主於情。魄者迫然着人。主於性也』、今据御覽八百八十六増改」と書かれている。この箇所は『太平御覽』によって字句を増加している

のである。ただし、すべてを『太平御覽』によって改めているのではない。『太平御覽』に引く『白虎通』の原文は抱經堂本とまったく同じというわけではないのである。『太平御覽』巻八百八十六「魂魄」の項に引用されている『白虎通』原文と抱經堂本との異同を記すと次のようになる。

白虎通曰、魂魄者何謂也。魂猶伝也（也）。行不休也。少陽之氣、故動不息、（於）人為外、（主於情也）。魄者猶迫然着人也。此少陰之氣、象金石着人不移（也）。（主於性也）。

（一）内の字句が抱經堂本にあつて『太平御覽』引用文にないものである。盧文弨の校訂の経緯は「白虎通校勘補遺」に記されているが、そこには「小字本」という版本の存在について書かれている。その小字本は「不知何代所刻、書中唯匡字減一筆、較太平御覽所載及王柏厚所引多合、以為北宋本近是、然不敢定也、今但稱小字本」と説明されている。出自が不明な版本であるが、宋代諸本に引用される『白虎通』の原文と多く合うところから北宋の古い刊本としてよいだろうとしている。そこで、盧文弨はこの版本を底本とするのである。しかし、この箇所は、『太平御覽』を見ても分かるように、諸本に引用された原文には細かな違いが見られ、完全に一致することはないのである。よってこの箇所の字句には底本とすべきものが存在しないと考えるてよいだろう。

『白虎通』は、『白虎通索引』が「諸本いずれも随所に錯簡・譌脱

を含み」と言い、また、「一として憑據すべき善本を見出し得ぬのが実情である」と言われるように、^⑥定本がないのが現状である。また、盧文弨の校訂についても、洪業『白虎通引得』序が「然彼未見大德本也」という問題点を指摘しているように、全面的に信頼できるものではない。このように、盧文弨の採用する版本も出処が不明確であり善本とは言い難く、また字句の校訂にも定見を見出しにくい現状を考えると、内容面から字句の妥当性を考えてみるのが有効となるのではないだろうか。

五、結論

既に見たように、盧文弨の校訂による抱經堂本の本文には、「魂魄」と陰陽の明確な対応関係が記されていたが、魂魄、陰陽、情性の対応関係において、同じ情性篇の中で「性陽情陰」「性陰情陽」という二通りの対応が存在するという矛盾があるのであった。一方、漢魏叢書本の原文では、魂魄と陰陽を明確に対応させる記述は見られず、情性篇の中に矛盾した記述も見られないのであった。

『白虎通』の諸版本が抱える問題や他書に引用される原文の字句に多く異同が見られる状況、また、その内容の整合性から考えると、漢魏叢書本の原文が本来のものであったとすることが妥当であると思われる。

漢魏叢書本には「魂魄」と陰陽の明確な対応関係は記されないが、「性陽」「情陰」と「魂情」「魄性」の記述から考えると、魂—情—陰、

魄—性—陽という関係が見て取れる。これは後の「魂陽」「魄陰」とは逆の関係である。漢魏叢書本が『白虎通』の原型だとすると、「魂魄」と陰陽の対応関係はこのように捉えられなければならない。

盧文弨の入手した版本は北宋のものだとされる。またそれが『太平御覽』と多く合うとされることから、宋代には盧文弨の入手した版本が流通しており、少なくとも宋代には『白虎通』情性篇の原文は、抱經堂本のようになっていたものと思われる。そこから推論されるのは、『白虎通』の原型は、「魂」と陽、「魄」と陰という対応関係は考えられておらず、むしろ逆であったのが、その後定式化される「魂陽魄陰」に影響されて改訂されたということである。それがいつのことであるかはわからないが、前後の関係を十全に把握することなく、この定式化された「魂魄」と陰陽の対応関係が原文に竄入された結果、情性篇内での対応の矛盾が生じたものと思われる。今後はこのことを踏まえ、「魂—陰」「魄—陽」という関係を視野に入れ、ほぼ同時代の『説文解字』と比較しつつ、魂魄観を捉えなおす必要があるであろう。

注

(1) 池田末利「魂魄考—その起源と發展—」(『東方宗教』第三號、日本道教学会、法蔵館、一九五三年六月)。

②同上。一頁に「人死すればその精神（魂）は天に昇り、その形骸（魄）は地に帰する」との信念は上代支那人の間に一般的であったと考へられる。禮記郊特牲に魂氣歸于天、形魄歸于地とあるはその代表的なものである。」とある。

③陰は「ひそかに」とか、地名などで使われている例が大半であつて、「陰陽」の「陰」で使われている例は四例である。

④東京大学森鷗外文庫・書き入れ文画像データベースで読むことができる。なお、それに付けられた解説には「鷗外は、全篇にわたり、朱筆で詳細に校訂を施しているが、これは書込み中に「莊本」とあることから、莊述祖撰『白虎通義放』を参照したと推測される」とある。なお鷗外文庫には、莊述祖撰『白虎通義放』の刊本、並びにその抄写本が所蔵されている。

⑤『白虎通索引』（附本文）（北海道中国哲学会「中国哲学」資料専刊第三号 一九七九年）の序を参考。

⑥永井弥人『白虎通』譯注・卷一 爵篇（一）『中国古典研究』第四十七号、二〇〇二年。

⑦『白虎通引得』序（商務印書館、一九六六年）。

（大阪府立大学大学院博士後期課程）